

G. ク ラ ッ プ 小 論 (その二)

宇 佐 美 道 雄

外 国 語 教 室

(1971年9月1日受理)

A Short Paper on G. Crabbe (Part II)

Michio USAMI

Department of Foreign Languages

(Received September 1, 1971)

Crabbe's poems were written between the late 18th and the early 19th century, the time when one of the most revolutionary change had been proceeding in the history of English literature. This change corresponded to the vast one, including the Industrial Revolution, in the whole society of England at the time.

In the previous part of the paper (part I), the Neo-classical aspects of Crabbe's poetry were discussed, and in this part (Part II) the Romantic ones were treated. It was pointed out as Crabbe's novelty of the day that he revolted against the convention of 18th century pastoral poems, that he combined the outer world with the inner world of man, that he was concerned about the human psychology, and that he was interested rather in the particular than in the general. The conclusion was that Crabbe's poetry represented itself as one of the landmarks which indicated, in the field of literature, the direction and the process of change that England herself had been undergoing in those days.

§5. G. クラップ (1754~1832) の一生は、英国史の中でも最も激しい変革期のひとつに当たっていた。クラップの生まれた2年後に英国は7年戦役へ参戦し、ビットを首相として積極的な進出政策の時期に入った。対外的にはアメリカ独立戦争とナポレオン戦争がそのあ続とにき、国内的には植民地統治の問題、旧教徒自由化の問題、戦時特別諸立法の問題、労働問題、選挙法改正の問題等が、その後の社会情勢を絶えず緊迫させた。若くして郷里を去ったクラップは、晩年にそこを訪れたとき

Thus once again, my native place, I come
Thee to salute — my earliest, latest home;
Much are we alter'd but I behold

In thee a youth renew'd — whilst I am old.

(わたしの生まれ故郷よ、おまえに挨拶しようと再びここに來た一幼いころの遠いふる里よ。わたしもおまえもずいぶん変わったが、おまえの中には若さのよみ

返えるのが見える—このわたしは年老いたのに。)

とその感慨を歌った。サフォークの貧しい漁村にも、時代の波がおし寄せていたものと思われる。

18世紀に入ってから少しずつ増加の傾向にあった英国の人口は、この世紀の半ば以降19世紀の初めにかけて、いわゆる「爆発的増加」を経験した²⁸。これには18世紀中に著しかった医療や衛生施設の改善が大いに与って力があったが、この人口増加が60年代以降急速に開発された新しい生産技術とあいまって、当時の英国の基幹産業を根柢から変革させた。農業地域にあっては、大規模な灌漑や排水、新式の農機具や耕作法を導入することによって生産性を高めるために、中小農民の所有地や村落の共有地がつぎつぎに囲い込み(enclosure)されて、大農園方式の農業が行なわれた。18世紀前半にイギリス全土で囲い込まれた農地が35万エーカーであったのに対して、18世紀後半から19世紀の初めにかけては、実に700

28 「1600年にイングランドおよびウェールズの人口は500万、1650年に550万、1700年に600万、1750年に650万であった。したがって人口は150年間にわたり150万の増加になった。それにつづく1750年から1801年の半世紀の間には、250万の人口増加があり、その増加率は前の期間にくらべて4倍になった。」ポール・マントウ、徳増、井上、遠藤訳『産業革命』東洋経済新報社、昭和39年

万エーカーの土地が囲い込まれたという²⁹。土地を失った農民は、賃金労働による小作人として村落にとどまるか、都市に出て新興の生産工場に働くか、いずれかを選ばざるを得なかった。1700年に8:2であった村落と都市の人口比率は、世紀の進むにつれて前者より後者への人口流出の結果、1770年には5:5、1820年には3.5:6.5と逆転した³⁰。農村から安い労働力の供給を受けた都市の産業資本は、いっそう大型化し、その蓄積した資本を再び農業経営に振り向けて、農園の規模を拡大した。こうして18世紀後半に始まって約半世紀に及んだ「産業革命」が進捗し、農村における地主と小作人、都市における資本家と労働者という、いわゆる近代的な階級およびその対立関係が形成された。

1780年に志を抱いて上京したクラブは、ロンドンに着いて間もなくG. ゴードン卿の騒擾事件³¹を目のあたり見たが、その50年後、死の前年にはブリストルで選挙法改正法案のための暴動を眺めた。この半世紀間ロンドンをはじめとして、ブリストル、マンチェスター、リヴァプール等、工業の発達した大都市においては、階級対立に基づく騒乱事件が頻発し、革命前夜の様相を呈した。農村地帯では、中小地主から自作農に至る階層が消滅して、少数の大地主と多数の小作農民が残ったから、貧富の対立は以前には見られないほど強く意識された。クラブは生涯の大部分を田舎の教区牧師として過したから、穏健な思想の持主ではあったけれども、農民生活の実態をつぶさに知っていた。したがってクラブが教区民たちの貧しさや苦しさや愚かさを詩に歌うとき、初期浪漫派詩人たちのように抱いた革命思想に何ほどか通じ合うものを、そこから見落すわけにはいかない。

these are scenes where Nature's
niggard hand
Gave a spare portion to the famish'd land;
Hers is the fault, if here mankind complain
Of fruitless toil and labour spent in vain;
But yet in other scenes more fair in view,
Where Plenty smiles — alas! she smiles
for few —
And those who taste not, yet behold her

store

Are as the slaves that dig the golden ore, —
The wealth around them makes them
doubly poor.
(The Village I)

(このあたりは悠深い自然が、飢えた土地にわずかの分け前しか与えなかったところ—この人たちが、報われぬ苦勞と空しい労働を歎くならば、それは自然の手落ち。しかし見る目にもっと美しいよその土地では、豊かさがほほえむ—悲しいことに少しの人にしかほほえまぬが。豊かな蓄えを見るばかりで味わうことのできぬ人たちは、金鉱を掘る奴隷のようなもの—まわりの富が、その貧しさを倍加させる。)

これらの詩行には、貧富の差にたいする怒りとまでいなくとも、うっ積した不満が滲み出ている。もちろんここに近代的な階級対立の意識はないけれども、その背後に新しい社会構成ができ上りつつあった過程を読むことは可能と思われる。18世紀と19世紀の変わり目を軸として起った大きな社会的変革を、浪漫主義運動は文学の分野で表現したが、そういう流れの中でクラブを見ると、この詩人は明らかに変革者の側に立っている。

クラブの初期の作品に『図書館』という諷刺詩がある。エドモンド・パークの知遇を得てクラブがドズリー出版社から出した最初の作品であるが、その内容は読書の効能をポーブ流の詩法を用いて教訓的に歌ったもので、現在では伝記的な研究の場合を除いてまず顧みられないことがない。この詩の中に、

Their [books'] aid they yield to all: they
never shun
The man of sorrow, nor the wretch undone;
Unlike the hard, the selfish, and the proud,
They fly not sullen from the suppliant
crowd.
(The Library)

(彼ら〔書物〕はすべての人に助力を与える。悲しみにくれる人や、落ちぶれた不幸な人を避けたりはしない。無慈悲な人、わがままな人、高慢な人と違って、すがりつく者たちから不興げに逃げ去ったりはしない。)

のような個所が見出される。18世紀古典派の詩風を忠実

29 アーノルド・トインビー、塚谷、永田訳、『英国産業革命史』邦光書房、昭和26年

30 同上

31 この年ロンドンのセント・ジョージ広場にG. ゴードンを首領と仰ぐ約2万の会衆が反政府集会を開き、そのあと暴徒と化したこれら会衆が5日間にわたって町中を掠奪し、ロンドンをほとんど無政府状態と化せしめた。

に守り、貴族社会にパトロンを得ようとした作品の中に、このような詩句が散見されるということは、その時代におけるクラブの新しさの一面を語っている。もちろんクラブの社会変革へ向おうとする傾向を、あまり過大視するわけにはいかない。クラブの作品が時代の新しい指向に正しく沿っていたというに止まる。R. L. Brettは「多くの批評家には、クラブを社会改革家として、またその作品を、貧しい田舎人の物質的向上を計る一革命運動として語りたがる傾向がある。クラブはたしかにそういう改善を歓迎したし、自分の作品のそれに貢献することを望んだに違いない。しかしこれが彼の目的ではなかったし、また作品を書くときの緊急課題でもなかった。社会的変革が彼の詩の性格に大きく影響したことはないまでもないが²³。」という。クラブの社会問題にたいする考え方と感じ方の中に、次の世代のその予兆と萌芽を認めれば十分ではあるまいか。

§6. クラブは下積みの人たちに同情し、いわゆる支配階級に反感を持ったけれども、彼の政治にたいする考え方そのものは、ほとんど無関心というに近かった。「彼の情熱が特定の政治思想に強く惹かれるということではなかったと思います。純粋に党派的な問題には、彼は終始無関心でした。……彼は不偏不党を貫いたので、高潔な人格を持ち、紳士としての教育があり、国家と利害を共にする人物でなければ、国会議員であっても取るに足りないと言言するのを、わたしは聞いたことがあります。……彼はどちらの政党の人物にも同じ敬意を払うばかりか、どちらの党にも進んで投票しました³²。」とクラブの息子は書いている。変革の時代に生まれて、この詩人が自らの意志において変革に参与したのは、やはり社会問題にたいしてではなくて、文学の分野においてであった。

クラブの『村』が出たとき、当時の一般読者はそれ

をゴールドスミスの『廃村』に比べて書かれたものとして受け取ったと、A. エインジャーはいう³⁴。『村』が『廃村』を念頭において書かれたことは間違いないにしても、クラブが熱意を込めて反ばくしようと試みた対象は18世紀田園詩の伝統そのものであって、ゴールドスミスの一作品に止まるものではなかった。当時において『廃村』は田園詩の伝統のいわば末端に立ったから、この最新流行の作品をやり玉にあげることによって、クラブは自分の立場を鮮明にしたに過ぎない。こうして少なくともその時点でのクラブは、この流れの最先端に位置した。『村』が出版された2年後にW. クーパーが『仕事』を出し、田園の自然を描いて詩壇に新風を吹き込んだから、1880年代に入るや田園詩の流れにひとつの転期が来ていたのかも知れなかった。

『村』の冒頭はよく引用されるが、クラブのこの詩の中で意図したもののが何であったかをそれは明瞭に示す。

The village life, and every care that reigns
O'er youthful peants and declining swains;
What labour yields, and what that labour
past,
Age, in its hour of languor, finds at last;
What form the real picture of the poor,
Demand a song — the Muse can give no more.
Fled are those times, when, in harmonious
strains,
The rustic poet praised his native plains:
No shepherds now, in smooth alternate
verse,
Their country's beauty or thier nymphs'
rehearse;

32 "Many critics tend to speak of Crabbe as a social reformer and his poetry as part of a revolutionary campaign to alter the material conditions of the rural poor. Crabbe, no doubt, would have welcomed such an improvement and would have been glad if his work had contributed to it. But this was not his aim, nor very present to him when he wrote. It is true of course, that social change affected the temper of his poetry," R. L. Brett: *George Crabbe* (Writers and Their Work, No. 75) London, 1956.

33 "I am sure, that his own passions were never violently enlisted in any political cause whatever; and that to purely party questions he was, first and last, almost indifferent he carried his impartiality so far that I have heard him declare, he thought it very immaterial who were our representatives in parliment, provided they were men of intergrity, liberal education, and possessed an adequata stake in the country.... He not only felt an equal regard for persons of both parties, but would willingly have given his vote to either; and at one or two general elections, I believe he actually did so." G. Crabbe (son): *The Life of George Crabbe*, London, 1947.

34 "...at the time of its appearance it was generally assumed that *the Village* was a rejoinder to Goldsmith's *Deserted Village*," A. Ainger: *Crabbe* (English Men of Letters), New York, 1930.

と主張しても、あながち間違いとはいえないかも知れない。

ともかく、クラップは美化された田園詩の様式の中に、むき出しの農村を持ち込んで、そこにひとつの革新をもたらした。そもそも田園詩のみならず詩歌一般の中で、人間の手の加わらない生みの山川草木鳥獣という意味での自然が、人びとの関心を引くようになったのは、18世紀も中葉を過ぎて以降のことであり、いわゆる自然復帰として浪漫主義復興への道を開く新しい傾向であった。現代においてクラップの詩の中で愛誦され得る個所といえば、まずは鋭い観察眼で微細に描かれた自然描写の部分を描いてほかにあるまい。クラップは海岸の描写が特に秀でているといわれるが³⁸、彼の描く自然は親しみ易い、ごく平凡な自然で、荘大なるいは崇高な自然を彼は決して描かない。人目を引くに足りない無意味な自然に目を向ける傾向は、同じ時期の絵画や庭園術にも現われており、それは人口の増大、下層階級の社会的進出、地方文化の向上、読者層の大衆化等を根拠とする社会全体の動向と、どこかで深く係わり合っていた。クラップは自分が暮した地方のひなびた生活と自然を題材にしてたくさんの詩を書いたが、それはやはり18世紀英詩壇個々の流れから発して、それに变革を加え、こうして19世紀英詩の出現に貢献したのであった。時代特有のさまざまな現象を背景としてそれらの作品を読むとき、現代では失われたまた別の文脈がそこに読み取れるのではあるまいか。

§7. クラップの自然描写は定評のあるところであるが、彼の作品全体の中でいわゆる叙景の部分の占める割合は、意外に少ない。『村』の第1部では『その一』に既に引用した不毛の砂地の描写16行を除くと、この作品の舞台となる漁村の自然に言及している個所は、あと6箇所しかない³⁹。クラップの自然描写がいかに後代の目を奪おうとも、クラップにとって叙景はやはり物語りに必要な背景の提示に過ぎなかったことを、われわれは一読して知ることができる。クラップについて語る批評家が、必ずといってよいほど言及する自然描写の優れた作品に『町』の中の『ピーター・グライムズ』と『物語詩』の中の『恋人の通い路』がある。ともに生れ故郷のサフォーク州オールドバラを念頭において、その何の取り柄もない海岸を描いている。そしてここには、科学の細密さを連想させるクラップ独得の自然が見ごとに形象化されている。しかしそのこととは別に、この2つの

作品には重大な共通点がある。それは描かれる風物が登場人物の感情を巧みに反映して、的確な心理描写を完成させる道具立てとして働いている点である。

『町』の第22書簡の主人公ピーター・グライムズは、小さいころからの極道もので、とうとう老父をなぐり倒して死に至らしめ、その後は放らつな生活が続けながら残忍な慾望を満たすために、みなし子を育児院から貰い受けては舟中で虐待し、2人までも罪のない子供を死亡させる。村中が騒ぎ出して役人に呼び出され、一応は証拠不十分で赦されるが、以後は里親になることを禁ぜられる。周囲から嫌われ、恐れられて、ピーターは世間を呪いながら人目をしのんで舟の中にひとり暮す。物語りは無駄なく進んで次の詩行に入る。

Thus by himself compell'd to live
each day,
To wait for certain hours the tide's delay;
At the same times the same dull views to
see,
The bounding marsh-bank and the blighted
tree;
The water only, when the tides were high,
when low, the mud half-covered and
half-dry,
The sun-burnt tar that blisters on the
planks,
And bank-side stakes in their uneven ranks;
Heaps of entangled weeds that slowly float,
As the tide rolls by the impeded boat.

(The Borough XXII)

(こうして余儀なく独りぼっちで毎日を送り、おそい潮流を何時間も待たねばならなかった。いつもいつも泥浜の土手と枯れた木の退屈な景色ばかりを眺めて。見えるものとしては、高潮のときには水ばかり、小潮のときには半ばかくれ半ば乾いた泥ばかり。そのほかは日に焼けて船腹にふくれるタール、不揃いに打たれた土手ぎわの杭、留めてある舟のわきを海水が走るとき静かに揺れる縫れ合った海草の山。)

この重苦しい叙景のあとに、さらに20行ほど泥浜の仔細な描写が続く。

There anchoring, Peter chose from man to
hide,

38 "...he had watched the sea in all its moods and no poet has given us so many or so fine descriptions of it." R.L. Brett: *George Crabbe*.

39 *The Village* I, line 109, 131~2, 150, 200 ~5, 321~2.

There hang his head, and view the lazy tide
In its hot slimy channel slowly glide;
Where the small eels that left the deeper

way

For the warm shore, within the shallows
play;

Where gaping muscles, left upon the mud,
Slope their slow passage to the fallen

flood;—

Here dull and hopeless he'd lie down and
trace

How sidelong crabs had scrawl'd their
crooked race;

Or sadly listen to the tuneless cry
Of fishing gull or clanging golden-eye;

(ibid)

(ここに舟を留めて、ピーターは人目につかないように努めた。頭をたれて、おそい海水が熱いぬるぬるした水路に沿ってゆっくり流れるのを眺めた。そこには暖かい岸辺を求めて深い泥から出てきた小さなうなぎが、浅瀬の中で遊んでいた。また泥の中に残された二枚貝が口を開いて、退いていく流れの方へゆっくりとすべっていった。力なく、希望を失って、ピーターはここに寝そべり、横に動くかにかがちこち走り回るのを目で追い、魚をとるかもめや、かん高く鳴く頬白がもの叫び声に、悲しく耳を傾けた。)

こうした生物図鑑の記述のような自然描写が、上の引用を含む前後約30行ほど続いたあとは、ピーターが身体の衰えるにつれて、犯した罪の亡霊に悩まされ、ついには救貧院のベッドの上で恐怖におののきながら息を引き取るという結末に至るまで、話しは再び一気に進行する。全体の中で自然描写が占める割合は、ここでも1割に満たないが、またそれだけに効果も大きい。慾望の赴くままに獣のように振舞ったピーター・グライズが、その悪業の報を受けて奈落へ向うちょうどその変向点に、つまり初めて孤独の重圧を経験する場面に、上記の自然描写が現われる。物語りの進行の点からも、また主人公の心の中を浮び上らせる点からも、この自然描写は効果的に働いている。

『恋人の通い路』は、詩人自身の若いころの体験をも

とにして書かれたといわれるが⁴⁰、話しそのものはむしろ単純なものである。若い男が恋人のもとへ馬を急がせるとき、海岸の田舎道はすべて美しく、また心地よく見える。しかし娘が他所へ出かけたと知らされ、がっかりしてそこへ赴くとき、周囲の風物は一変して不愉快に見える。道のりは遠く感じられる。やがて男は娘に会い、やむを得ぬ用件で留守にしたことを知らされ、2人手をとって家路につく。そのとき、もういちどすべては朗らかに見える。

Where the dark poppy flourished on the dry
And sterile soil, and mock'd the thin-set rye.

(*The Tales in Verse*)

(黒っぽいひなげしが乾いてやせた土地に咲き、まばらに生えたいい麦をあなどる。)

Fresh herbs the fields, fair shrubs the
banks adorn,
And snow-white bloom falls flaky from the
thorn;
(ibid)

(新鮮な牧草が野原を、美しい灌木が土手を飾る。そして真白な花びらが、さんざしの枝から舞い下りる。)

このような佳句が到るところに散りばめられて、全体がどことなく植物づくしの趣きを呈する。そしてここでは描かれる自然は、そのまま主人公の内面心理を反映する鏡となる。

ところでこの作品には、話しに入るに先立って、17行の詩句が前置きされていて、

It is the soul that sees; the outward eyes
Present the object, but the mind describes;
And thence delight, disgust, or cool indifference rise:

When minds are joyful, then we look around,
And what is seen is all on fairy ground;
Again they sicken, and on every view
Cast their own dull and melancholy hue;
(ibid)

(ものを見るのは心である—外なる目が物を示すが、

40 "It was in his walks between Aldeburgh and Beccles that Mr Crabbe passed through the very scenery described in the first part of *The Lover's Journey*;... the disappointment of the story refers to an actual experience of my father during one of his visits to Brccles as a young man to see his future wife, Sarah Elmy." G. Crabbe: *The Life of George Crabbe*.

識別するのは心である。この部分から喜びや嫌悪や冷たい無関心が生れる。心にうれしさが満ちるとき、周囲を見わたせば、すべてが美しい大地の上に見える。また心が病むときは、自らの鈍い陰気な色調を、すべての上に投げかける。）

と書き出されている。クラブは哲学に興味を持たなかったから、このように知覚についての理論を詩行に表わすことは絶えてなかったけれども、この1個所によってクラブが外界とそれを見る人の心の働きとの関係を、どのように考えていたか、明瞭に知ることができる。たぶんこうした考え方は、多くの人間を観察しているうちに、経験的に身につけたものと想像される。そうしたわけでクラブから見ると、外界と人間の心は密接に結び付いており、前者はむしろ後者の投影にほかならない。だからクラブが自然を描写するとき、それは単に自然物を提示するに止まらず、それを見る人の内面心理を適切に反映することとなる。

ここにクラブのその時代における新しさー浪漫主義的傾向がある。R.L. プレットは『ピーター・グライムズ』の既出の自然描写を解説して「これらの詩行は、タムソンやクーバーにみられる 18 世紀流の自然詩ではない。……クラブは特殊な物語詩人であり、彼の作品には面白い話をする才能以上の何かがある。わたしはすでにクラブの人間心理への敏感さについて語った。彼はこの点では 18 世紀よりむしろ新しい時代の子である。浪漫主義とは人間の内面を指向するものにほかならなかったから⁴¹。」という。実際、外なる自然は人間の内なる心の中にあるとする命題は、浪漫主義の前提条件ともいふべきものであり、コールリッジの『失意』がそれを鮮明に歌い上げている。

we receive but what we give,
And in our life alone does Nature live;
Ours is her wedding garment, ours her
shroud!
And would we aught behold, of higher
worth,
Than that inanimate cold world allowed
To the poor loveless ever-anxious crowd,
Ah! from the soul itself must issue forth
A light, a glory, a fair luminous cloud

Enveloping the Earth—

And from the soul itself must there be sent
A sweet and potent voice, of its own
birth,

(*Dejection: an Ode*)

(われわれは与えるものを受け取るに過ぎない。そしてわれわれの生の中にのみ自然は生きている。その結婚衣裳はわれわれのもの、その経かたびらもわれわれのもの。あわれな、愛を知らない、あくせくする群集に与えられる生気のない、冷たい世界以上に価値ある何かを見ることがあるだろうか。ああ、まさに魂から、光が、輝きが、美しく明るい雲がほとばしり、大地をつつむ—そして、まさに魂から、優しく力強い声が送られてくる—魂そのものから生れた声が。)

これは『恋人の通い路』の前置き部でクラブが歌った
 “It is the soul that sees; the outward eyes/
 Present the object, but the mind describes;/
 And thence delight, disgust, or cool indif-
 f'rence rise:” という詩句と、その思想において全く
 同じではないか。クラブの例えば自然描写の背後にう
 かがわれる内的世界への重視は、この詩人を通して18世
 紀の英詩が既に19世紀に足を踏み入れていたことを示し
 ている。

§8. クラップの中では人間の心理や感情に注意を払う傾向が、年を経るにつれて次第に強まっていっただけでなく、後期の作品の中では、「わたしの主題は、まさに人間の心である⁴²」とまで言い切っている。しかし既にして『町』の中に、人間の内面をいきいきと描いて読者の脳裏に焼き付けずにはおかない例が、いくつか見られる。第9書簡『娯楽』の中で、町の人たちが舟に乗って遠足に出かけ、砂洲の上に取り残されて、次第に夕やみが迫ってくる、そんな場面が描かれている。こういう特異な状況の中で、個々の人間の示すいろいろな反応を、クラップはリアルに描く。あるものは恐怖で口がきけないし、

While fiercer minds, impatient, angry, loud,
Force their vain grief on the reluctant crowd
(*The Borough IX*)

(一方、気性の烈しい人たちは、がまんし切れず腹を

41 "He is a narrative poet of a special kind; there is more in his work than the ability to tell a good story. I have already spoken of his psychological acumen. Crabbe is, in these respects, a child of the new age rather than of the eighteenth century. For Romanticism was nothing if not introspective." R.L. Brett: *George Crabbe*.

42 "my theme/No other than the very heart of man." *Poetical Works*, Oxford, 1944.

立て、大声に、嫌がるみんなに向って無益な悲歎をぶちまける。)

A few assay'd the troubled soul to calm;
But dread prevail'd, and anguish and alarm.

(ibid)

(2, 3のものは騒ぐ心を鎮めようと努めるが、恐怖に、さらには苦悩と驚きに、ひしがれる。)

Childrn, by love then lifted from the sea
Felt not the waters at the parents' knees,
But wept aloud; the wind increased the
sound,

And the cold billows as they broke around.

(ibid)

(子供たちは愛するものの手によって、水面から持ち上げられているので、両親のひざまできている水に触れることはない。それでも彼らは大声に泣く。風が音を増し、冷たい波も、打ち寄せるほどに音を増す。)

また第23書簡『刑務所』では、死刑を宣告された囚人が、執行日の来るのを待つところが描かれるが、この異常な状況に置かれた人間の内部を描くクラップの筆致には、驚くほどの迫真力がある。

e'en in sleep the impressions all
remain,
He hears the sentence and he feels the chain:
He sees the judge and jury — when he
shakes,
And loudly cries "Not guilty!" and awakes:
Then chilling tremblings o'er his body creep,
Till worn-out nature is compelled to sleep.

(*The Borough XXIII*)

(夢の中にもそのときの印象はすべて残り、彼はあの宣告を聞き、鎖を肌に感じた。判事と陪審員を見て—とたんに波は身ぶるいし、大声に「無罪」と叫んで、そして目覚めた。やがて冷たいふるえが身体中を這い、ついには力もすり切れて眠りに落ちるほかなかった。)

この苦しい眠りの中に、過去の美しい幻影が現われて、ひととき哀れさを際立たせる。

Then comes his sister and his village
friends,

And he will now the sweetest moments
spends

Life has to yield;

(ibid)

(やがて妹や村の友人たちが現われて、…彼は人生の与えるもっとも楽しいひとときを過す。)

Now arm in arm, now parted, they behold
The glitt'ring water on the shingles roll'd.

(ibid)

(いまや2人は腕を組み、ふたたび離れて、きらきら光る海水が浜の小石に漂うさまを見た。)

こうしてクラップは内面描写への傾斜をいっそう強めて、「クラップは後になるほど、小説家が心理学としてわきまえているものの巧みな使用を示すこととなった⁴³⁾」といわれることになる。

そうはいっても、『その一』の中で述べたように「クラップの詩の主題は一ボーブとジョンソンの写実的諷刺詩の場合と同じく一人と風俗である。もっともロンドンの人と風俗ではなくて、オールドバラのそれではあるが⁴⁴⁾」とするシグワースの見解は、大筋においてはやはり正しく、クラップの作品をその系列内でのいわば変種のひとつと考えるのが適当ではないと思われる。主題は同じでも、題材がロンドンから地方の一漁村に移ったということ自体、それだけでも大きな意味を持っていたし、また同一主題とはいえ、クラップは特に人間の内面世界に描写の重点を移したわけである。さらにクラップの新しさは、これらの点だけに止まるものではなかった。さきの『娯楽』と『刑務所』の引用例にもあらわれているように、クラップの場合には、描く対象が個別的で特殊なものに向けられる傾向があった。普遍的 (general) なものよりも個別的 (particular) なものに注目した点で、クラップは一歩時代に先んじていた。

G. センツベリーは「ジョンソンにはクラップが名声を得たような詩行を書くことは決してできなかった。この偉大な辞書編纂者は、クラップよりも普遍的な人間というものについてよく知っていた。しかし個別的な人間を捉えて表現するクラップの力量に匹敵するものを、どこにも見せていない。クラップは最初のそしてたしかに

43 "Crabbe, later, was to show,..., his mastery of what novelists know as psychology."

H. Child: *George Cradde* (Cambridge History of English Literature XI) London 1932.

44 本小論 (その一) の註8参照

最高のリアリストのひとりであり、このリアリストという言葉の古い哲学上の意味を逆転させて、彼は個別的なものに専心した⁴⁵⁾という。たしかに18世紀という時代は、啓蒙思想を主流とする時期で、それが発しては理神論、合理主義、古典派文学等となったから、普遍性、法則性、画一性は尊ばれたけれども、特異なもの、個別的なもの、独創的なものは、一般に排斥された。しかし啓蒙に支えられて18世紀の自然研究が進むうちに、固く信じられた「存在の法則性」そのものの実在が疑われ、ついには18世紀合理主義の破産を招くこととなった。19世紀初頭に花開いた浪漫主義の精ずいが、個性、自由、多様性の讃美にあったことを考えれば、ジョンソンと対比してのクラップの新らしさは一目瞭然といつてよいのではあるまいか。

§9. 詩の作り方 (composition) と文体 (style) — 広い意味での詩の技巧 (art of poetry) に関する限り、古典派末期と浪漫派初期の考え方には鋭い対立があり、それは一方から他方へ徐々に移行したのではなく、1800年の『抒情民謡集』序文出版を契機として一気に変革された—そしてその両者の考え方の間に優劣の差は存在しない、とする意見がある⁴⁶⁾。きわめて興味ある見解であり、この議論の範囲内でいえば、クラップの詩の技巧は、『その一』第4章で詳述したように、まさに古典派末期に属した。しかし詩はたんに技巧のみによって書かれるものではなくて、当然のことながら作品の主題や素材、詩人の思想や感情を不可欠の要因としている。そして大かたの方向としてクラップが古典派に属したとはいえ、田園詩の伝統に反逆し、自然と人間心理を結び付け、人間の内面世界に優位を与え、さらに普遍より個別へと目を向ける等、いくつかの点において、古典派に欠けて浪漫派に属する面をクラップは示した。そして、一時期を画して突然に革命が行なわれたとする作詩法を含めて、詩を構成する一切のファクターが、18世紀後半から19世紀初めのわずかの期間に、なぜに、そしていかにして対照的な変化を達成したか、これはきわめて興味ある問題と言い得る。

R. ウィリアムズは『文化と社会 1780—1950』の中で“industry”, “democracy”, “class”, “art”, “cul-

ture” という5つの語を取り上げて、産業革命期を境にこれらの言葉に新しい語義が加わった事実を例示して、近代社会を画する時期をそこに求めた⁴⁷⁾。文学作品の上に現われるすべての徴候は、R. ウィリアムズのいうように、文化、政治、経済、技術等一切の社会的諸現象と密接に関連しあっているに違いない。そしてこれらのもつれた糸を、たとえ極微とはいえ部分的にでも解きほぐすことができたとしたら、あるいは解きほぐしたという実感を確認することができたとしたら、これはまた大きな喜びと言い得よう。クラップの作品に見られるいくつかの特徴を通して、その背後にある大きな存在の動向をうかがおうと試みた本小論の意図はここにあった。

引用および参考書目

- G. Crabbe: *The works of the Rev. George Crabbe*, John Murray, 1823
- F. Whitehead (editor): *George Crabbe, Selection from his Poetry*, Chatto & Windus, 1955
- G. Newbold (editor): *A Crabbe Selection*, Mac-Millan, 1967
- A. Aainger: *Crabbe (English Men of Letters)*, New York, 1903
- R.L. Brett: *George Crabbe (Writers and Their Works, No. 75)*, Longmans, 1956
- H. Child: *George Crabbe (The Cambridge History of English Literature)*, London, 1932
- G. Crabbe (son): *The Life of George Crabbe*, The Cresset Press, 1947
- J.W. Draper: *Metrical Tale in XVIII Century England*, P.M.L.A. XLII, 1937
- L. Haddakin: *The Poetry of Crabbe*, Chatto & Windus, 1955
- R. Huchon: *George Crabbe and his Times, 1754-1832*, London, 1907
- G. Saintsbury: *Essays in English Literature 1780-1860*, London, 1895
- O. Sigworth: *Nature's Sternest Painter*, Univ. of Arizona, 1965

45 “Johnson could never have written the passages which earned Crabbe his fame. The great lexicographer knew man in general much better than Crabbe did; but he nowhere shows anything like Crabbe's power of seizing and reproducing man in particular. Crabbe is one of the first and certainly one of the greatest of the 'realists' who, exactly reversing the old philosophical signification of the word, devote themselves to the particular only.” Saintsbury: *Essays in English Literature*, 1780-1860, London, 1895.

46 Introduction of *The art of Poetry* 1750-1820. P.W.K. Stone, London, 1967.

47 Introduction of *Culture and Society 1780-1950*, Raymond Willams, London, 1959.

- H. Greason: *A Critical History of English Poetry*, Chatto & Windus, 1950
- W. Hazlitt: *The Spirit of the Age*, London, 1825
- P.W.R. Stone: *The Art of Poetry 1750-1820*, Routledge & Kegan Paul, 1967
- L. Stephen: *History of English Thought in the Eighteenth Century*, New York, 1962
- B. Willey: *The Eighteenth Century Background*, Chatto & Windus, 1955
- R. Williams: *Culture and Society 1780-1950*, Chatto & Windus, 1959
- 『英米文学史講座第5巻—18世紀Ⅰ』研究社, 昭和36年
大和資雄: 『クラブ』(英米文学評伝叢書30)研究社, 昭和9年
- A. トインビー (塚谷, 永田訳): 『英国産業革命史』邦光書房, 昭和36年
- P. マントウ (徳増, 井上, 遠藤訳): 『産業革命』東洋経済新報社, 昭和39年